

Digest of Science of Labour

労働の科学

2 0 2 3
April
Vol. 78 No. 4



かたちの経験 / 菅沼 緑

特集

農業が拓く未来に夢を託して

60歳から農業に挑戦 / 高原久美
農家秘伝の「白毛もち米」復活の軌跡 / 竹上一彦

巻頭言

AIと労働
井上枝一郎

連載

ILOインド南アジア産業保健通信④

川上 剛

漂流者たち—クミジヨの肖像②⑤

本田一成

凡夫の安全衛生記⑦④

福成雄三

芸能従事者の今②⑩

森崎めぐみ

つれづれなるままに⑨

千葉百子

自由と想像④

菅沼 緑

労働の科学

2023
April
Vol. 78 No. 4

巻頭言

俯瞰 (ふかん)

AIと労働

井上 枝一郎 [大原記念労働科学研究所 主管研究員]

1

表紙作品：菅沼 緑「かたちの経験」
材料：硬質ウレタン
会場：トキワ画廊（東京・神田）
年度：1971年
撮影：杉本明人



農業が拓く未来に夢を託して

60歳から農業に挑戦

[徳島県板野町高原農園] 高原 久美 4

農家秘伝の「白毛もち米」復活の軌跡

[長野県農民連会長] 竹上 一彦 8

Series

ILOインド南アジア産業安全保健通信 (4)

さまざまな労働分野が協同するILOの技術協力活動 川上 剛 15

芸能従事者の今 (20)

AIによる健全な労働の危機 森崎 めぐみ 18

「#教師のバトン」で伝わる (22)

教職員の過酷な勤務環境 藤川 伸治 23

Series

- 漂流者たち クミジョの肖像 (25)
『クミジョ白書2021』(2) 本田 一成28
- 凡夫の安全衛生記 (74)
『組織を離れて振り返る』..... 福成 雄三30

Column

- つれづれなるままに
映画に学ぶ〈4〉「ラーゲリより愛を込めて」 千葉 百子33
- 自由と想像 (4)
彫刻に向かって 菅沼 緑43
- Talk to Talk
彼我にさまよい 肝付 邦憲 44
- 演劇が描く「働く人々」
『アルジャーノンに花束を (ダニエル・キイス)』
天才に生まれ変わったチャーリーの悲劇..... 編集部46
- BOOKS
『AI社会の歩き方 人工知能とどう付き合うか』
『絵と図でわかるAIと社会 未来をひらく技術とのかかわり方』
AIと人間が共存する未来 椎名 和仁48
- 『平和憲法をつくった男』
憲法に生命を吹き込んだ法律家・政治家の生涯をたどる 細川 潔49
- 『しなやかな心とキャリアの育み方 人生に Sense of Wonderを』
自分らしい人生を創造したい人のための応援歌 編集部50
- 労働科学のページ52
- 次号予定・編集雑記 64

AIと労働

井上 枝一郎

筆者がチャットGPTに「これからの労働はどうなる」と質問したところ以下のような回答が返って来た。「①作業が自動化し生産性は向上するが雇用は失われる。しかし、創造的・対人関係などの能力が求められる業務は増加。②働き方改革が進み遠隔作業や柔軟な働き方が一般化する。生活や価値観の多様化に応じた労働時間や休暇制度が希求される。③デジタル技能が重要となる。プログラミングやデータ分析等の技能を必要とする分野が増加。④海外で働く事が一般化する。文化の違いなどへの適応力が求められる。⑤気候変動対策として再生可能エネルギー分野での雇用が増大する」。

多分、この回答は学生のレポートとしては十分に単位が取れる水準であろう。この回答に見られるように、今や、AIが人間労働の大半に取って代わるのではないかと世の中は百家争鳴である。思想家のハンナ・アーレントは、人間の営みを「労働」、「仕事」、「活動」の三つに分類している。「労働」とは自らの生命維持のために必要な苦しい営みであり、「仕事」とは個人の能力を発揮して社会のために何かを残す行為（作品・建築などの社会遺産）だとし、「活動」とは思想と行動の独自性を発揮して共同体の活動に参画する営み後には何も残らないだとしている。

AIは当初、苦役である「労働」から人間を解き放すべく出発したのは事実で

あろう。ところが、今やエッセンシャルワークまでもがその多くがAI化している（自動運転、サービスロボット、治安維持用の監視装置等々）。一方、「仕事」についても労苦の結果として残る作品の多くはAIの助けを借りている。ただし、仕事を通じて体感する人間の喜びや達成感などはAIの働きとは別物だとされる（しかし、既に介護ロボットによる会話対応などは高齢者には癒しになっているという）。残る「活動」についてはどうだろうか。ある評論家に抛れば、政治活動にもAIは有用だという。国会答弁さえもAIに抛っていると耳にする。霞が関の明かりは朝の4時頃まで付いている、という官僚の働き方も変わるに違いない。一方で、AIは人間生活に幾つかの悪影響を及ぼす事も知られている。それらは、①人権の侵害（組み込まれたアルゴリズム次第で）。②データの透明性（習得データの範囲と質）。③セキュリティの確保（対応の誤謬性と漏洩）。

先の国際会議（デジタル・技術相会合）でもAIへの対応についての議論は定まらない。AIを巡っては混とん（カオス）の時代というべきであろうか。昔はテンポの早い様子を「日進月歩」と表現したが、現在は「分針秒速」だと言う。半世紀前のSFを開くと映像通話やドローン、ロボットなどがその主役であった。しかし、今ではそれらは当たり前なものとして存在している。AIが進化



ザボリージャ原子力発電所視察時

井上 枝一郎
大原記念労働科学研究所 主管研究員

を続ける事で人間から意思決定を奪い取り予測不能な変化が起こる事をシンギュラリティと呼ぶ。一体、どんなシンギュラリティが我々を待ち受けているのだろうか。

人は対象が明らかかな時は恐怖を、明瞭でない時は不安を覚えるという。多分、かかる憂慮は、進展するAIを人間が将来にわたって制御し切れないのではないかとという不安から来ているに違いない。人間の営み（特に労働）については、誰かこの不安感を払拭してはくれないものだろうか。

「労働科学」が創始されて100年を超えるが、未だに真の意味での「労働からの解放」は達成されていない。10年後というスパンを設定しても良い。AIが実現し得ているもの、宿題として残るもの等々について議論を起こしたい。多くは望まない。現時点では滑稽なSF物語で結構である。未来の「労働の姿」について特に若い世代のSF談義を聞いてみたい。

